



生物多様性センター Biodiversity Center of Japan

第11号

ニ ュ ー ズ レ タ ー

2004. 4.25

CONTENTS

生物多様性情報システム (J-IBIS) の更新と紹介リーフレットについて	1~2
日本版バイオセーフティクリアリングハウス (J-BCH) が開設されました	3
生物多様性センターに富士山ライブカメラを設置しました!	3
平成15年度都道府県担当者会議の開催について	4
1/25, 000植生原図公開の予告	4
生物多様性センターに収蔵している標本の紹介 (第二回)	5
新着図書のご案内	6
センターの動き・お知らせ	6

生物多様性情報システム (J-IBIS) の 更新と紹介リーフレットについて

生物多様性センターでは、自然環境保全基礎調査により集積された成果をはじめとした、日本の自然環境、生物多様性に関する情報を総合的に収集・管理・提供するためのシステムとして、1998年(平成10年)より「生物多様性情報システム (Japan Integrated Biodiversity Information System: 略称 J-IBIS)」を運営しており、インターネットより情報提供しています。

同システムは、毎年データベースの追加および機能の充実を図っておりますが、新しく更新される内容をご紹介します。

生物多様性情報システム (J-IBIS) URL : <http://www.biodic.go.jp/J-IBIS>

◆ J-IBIS の紹介リーフレットができました!!

今回の更新も含む J-IBIS の概要をご紹介しますためにリーフレット (英文併記) を作成しました。入手をご希望の方は、以下のメールアドレス、または下記の連絡先までお問い合わせください。なお、J-IBIS および生物多様性センターのホームページ上から、PDF 形式のリーフレットも提供いたします。

リーフレットの入手に関するお問い合わせ先
生物多様性情報システム担当 宛
E-mail: webmaster@biodic.go.jp

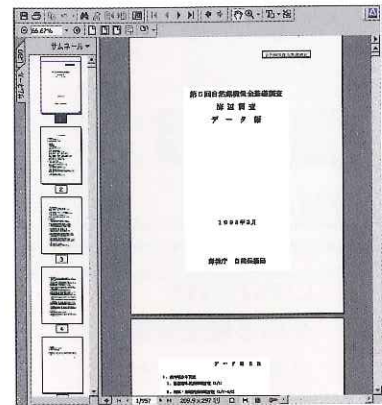


◆今回の更新内容について

1. ほぼすべての既存報告書を電子化して掲載！

これまで J-IBIS 上で約50冊の自然環境保全基礎調査の報告書が PDF 形式または HTML 形式によりダウンロード・閲覧が可能でした。今回、約100冊を追加し、約150冊の報告書がダウンロード・閲覧が可能になりました。これにより既存の自然環境保全基礎調査の報告書はほぼすべて閲覧が可能になります。

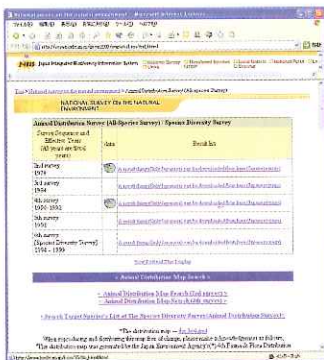
今後は新しく発表される報告書を追加掲載していくことはもちろん、既存の地図・調査票などの資料も可能な限り電子化し、掲載していきたいと考えております。



報告書の画面表示例

2. 英語版ページの更新！

自然環境保全基礎調査の概要ページについて、日本語ページの内容とほぼ同じ内容が閲覧できるよう、英語版ページをリニューアルしました。日本語ページと同様に、基礎調査の経緯がわかる一覧図と成果報告書の英名も掲載を予定しておりますので、海外の方にも日本の自然環境保全基礎調査の内容をより深く認識してもらえると期待しております。



英語版のページの例

3. 新しいデータベースの追加！

新しい調査成果として、特に問い合わせの多い以下の2つの調査成果をデータベース化して公開いたします。また、これまでの成果と同様にデータベースの検索結果のダウンロードや検索結果を元にした分布図の作成なども可能になります。

- ・種の多様性調査（動植物分布調査） 第1期調査成果 調査時期：平成 9,10 年度
- ・湿地調査 成果 調査時期：平成 5, 6 年度

4. RDB（絶滅危惧種）情報ページの更新！

絶滅のおそれのある種を掲載した本として、様々な生物多様性の保全活動の現場で基礎資料として利用されているレッドデータブック。RDB 種情報ページはこのレッドデータブックの情報をホームページ上で公開することを目的とし、J-IBIS の開設以来、人気コンテンツとして利用されてきました。

今回の更新では新しく刊行されたレッドデータブックの情報を追加するとともに、新しいコンテンツとして「地域の RDB 種情報」を作成し、都道府県が独自に選定している RDB 種に関する問い合わせ先、掲載ページへのリンクを作成しました。

日本版バイオセーフティクリアリングハウス (J-BCH) が開設されました

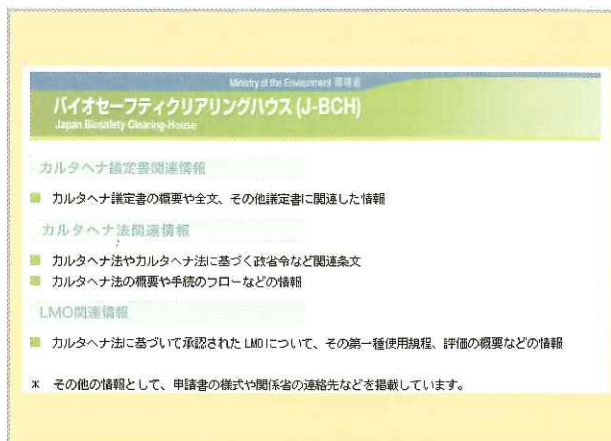
遺伝子組換え生物等 (LMO) は、うまく利用するのであれば、環境問題や食糧問題を解決する一つの手段となります。その一方で、LMOの利用による生態系への悪影響が心配されています。

そのため、LMOの輸出入に関する国際的な規制の枠組みである「生物多様性条約バイオセーフティに関するカルタヘナ議定書 (カルタヘナ議定書)」が、2000年1月に採択されました。これを受けて、我が国では議定書を日本で実施するための法律である「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律 (カルタヘナ法)」を制定しました。カルタヘナ議定書及びカルタヘナ法は、本年の2月19日より発効しています。

それに合わせて、カルタヘナ議定書及びカルタヘナ法に関する情報を収集して提供する場として、生物多様性センターのサーバー上にウェブサイト「日本版バイオセーフティクリアリングハウス (J-BCH)」を開設しました。

<http://www.bch.biodic.go.jp/index.html>

このサイトでは、①カルタヘナ議定書関連情報、②カルタヘナ法関連情報、③ LMO関連情報、④



その他の情報 を掲載しております。

LMOに関する国民の関心が高いことから、このサイトではカルタヘナ法及びカルタヘナ議定書に関する情報を、なるべく多く提供していく予定です。

なお、国外で利用できるLMOや各締約国の国内規制に関する情報など、国際的な情報に関しましては、カルタヘナ議定書事務局が運営するウェブサイトである「バイオセーフティに関する情報交換センター」をご覧ください。

<http://bch.biodiv.org/Pilot/Home.aspx>

生物多様性センターに富士山ライブカメラを設置しました！

生物多様性センターに動画ライブカメラを設置しましたので、富士北麓から見た富士山のリアルタイム映像を環境省の提供するホームページ「インターネット自然研究所」の1コンテンツ「国立公園ライブ映像 (動画)」をとおしてご覧頂けます。カメラは上下左右、ズームも可能な仕様となっています。雪を戴いた富士山頂をズームアップすると、雪が吹き飛ぶ様子を見ることも出来、自然のダイナミックさを感じることができます。また、カメラ映像は館内に設置した大画面液晶モニターからも見ることが出来ますので、近くにお越しの際にはどうぞお立ち寄り下さい。

インターネット自然研究所 平成15年度の更新について

インターネット自然研究所 平成15年度バージョンアップは、生物多様性センターに動画の富士山ライブカメラを設置すると共に、群馬県・草津「西の河原公園」(上信越高原国立公園)にも動画カメラを設置しました。今後、ライブ映像の動画提供についてニーズが高まっていけば、今後も設置箇所を増やす等検討していきたいと考えておりますので皆さまのご意見をお聞かせいただければ幸いです。

また、一般国民参加型の生きもの調査「四季のいきもの前線調査」では、携帯電話用コンテンツを開発しておりますが、この度、投稿情報について写真も添付できる仕様へと改善致しました。カメラ付き携帯電話が一般化しつつある今日、機能を十分に活用した情報をお寄せいただければ、より深みのある情報を全国の皆さまに提供することが可能となります。皆さまもこの機会にどうぞお試しください。



(左) 設置したライブカメラ

国立公園ライブ映像 (動画版) のページ
URL : <http://www.sizenken.biodic.go.jp/pc/move/html/>

平成15年度都道府県担当者会議の開催について

平成16年 1月28日、経済産業省別館において平成15年度都道府県担当者会議が開催されました。本会議は、環境省生物多様性センターにて実施された業務内容に関して各都道府県関係課室と意見交換を行うことを目的に、毎年開催しており、各都道府県の自然環境保全基礎調査担当者に出席して頂いています。

本年度の当該会議の議題は以下の通りです。

- 1 第6回自然環境保全基礎調査等の概要
- 2 平成15年度実施調査及び平成16年度実施予定調査の概要
- 3 モニタリングサイト1000
- 4 生物多様性情報の提供及び自然環境情報GIS
- 5 標本及び図書資料の収集
- 6 都道府県委託調査
- 7 自然系調査研究機関連絡会議について



1/25,000植生原図公開の予告

自然環境の最も基礎的な情報である植生原図は、自然環境保全施策の適切な推進において必要不可欠な資料であり、社会におけるニーズは年々高まってきております。平成11年度より始まった第6回自然環境保全基礎調査植生調査は、調査開始から5年間に経過し、その成果物である植生原図(1/25,000)は、全国の約27%について植生原図の作成が終了しました。

この作成済みの植生原図を平成16年度より、段階的に生物多様性センターホームページ(<http://www.biodic.go.jp/>)にて公開する予定です。

The collage features three main components:

- Top Left:** A satellite-style map showing a detailed view of a landscape with various terrain features and a grid overlay.
- Top Right:** A screenshot of a web browser displaying a data table with multiple columns and rows, likely representing survey data.
- Center:** A screenshot of a web browser showing a form titled "自然環境保全基礎調査植生調査" (Natural Environment Conservation Basic Survey Vegetation Survey). The form includes fields for "調査地" (Survey Location), "図章名" (Map Sheet Name), "調査種" (Survey Type), "都道府県" (Prefecture), and "ブロック" (Block).
- Bottom Left:** A smaller map showing a regional overview with colored blocks indicating different survey areas.

生物多様性センターに収蔵している標本の紹介 (第二回)

和名：イリオモテヤマネコ
RDB ランク：EN (絶滅危惧 I B 類)
 英名：Iriomote cat
 学名：*Felis iriomotensis* (Imaizumi, 1967)
 形態の特徴：体はオスのほうが大きく、頭胴長はオスで約55~60cm、メスで50~55cm、尾長23~24cm、体重3~4kg。体色は全体に黒っぽく、背中や側面は焦茶色、側面に灰褐色の地色に暗褐色の斑紋が散在し、腹面は単色。頭部が小さく、四肢や尾が太い。後頭部から額、目の周りに白色と黒色の縞模様をもつ。耳介は先が丸く、背面に白斑をもつ。分布：沖縄県八重山郡西表島のみ分布する日本固有種である。



生物多様性センターの標本収蔵庫に収蔵されているイリオモテヤマネコの標本は、1996年4月6日に西表島の県道南風見線上で交通事故死した個体（一部腐乱）として発見され、西表野生生物保護センターに運び込まれた個体を剥製化したものです。

イリオモテヤマネコは沖縄県八重山諸島の西表島だけにすむ野生ネコで、世界的にもっとも分布域の狭いネコの仲間として知られています。島民の間では昔から知られており、通常は「ヤママヤー」、特に大型の個体は「ヤマピカリヤー」と呼んでいました。しかし、学問的発見は1965年、新種として正式に記載されたのは1967年と、哺乳類としては比較的最近の事です。

おもに夜行性ですが昼間も活動し、交尾期以外は単独生活を送ります。地上生活が活動の中心ですが、よく木にも登ります。また、ネコ類としてはめずらしく水を嫌わず潜水して魚を捕えるほど泳ぎが巧みな事が知られています。本種は西表島における食物連鎖の頂点に立っていて、小型哺乳類、鳥類、爬虫類を中心に、季節に応じてあらゆる動物を食料にしています。

生息域は標高200m以下の低地林や河川沿い、海岸沿いに集中していて、山岳部には数があまり多くありません。このため土地開発などの影響を受けやすく、さらに年間2~3頭が交通事故によって死亡しています。また、人為的に持ち込まれ野生化したイエネコが、本種の生活圏に大きく食いこみ脅威となっています。

個体数は現在わずか100頭余りといわれおり、レッドデータブックでは絶滅危惧 I B 類にランクされています。1995年、環境省によって設立された西表野生生物保護センターでは、自動撮影や臨床病理検査等のモニタリングによる調査研究や、交通事故等で負傷した個体の治療、野生復帰を行う保護増殖事業、交通事故防止キャンペーンや説明会等の普及啓発事業を通じて、現在もイリオモテヤマネコの保護に取り組んでいます。

頭部背面 (左) と本剥製 (右)



※センターストック標本：本剥製

※参考文献：改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（レッドデータブック）1 哺乳類類・環境省編

新着図書のご案内

『海をわたる蝶』 日浦 勇著、蒼樹書房、1973年刊

希少な種でもなく、目をみはるような美しい羽をもつでもない。私たちの住む町や畑で普通に見られる蝶をとりあげ、その不思議な生態を紹介しています。著者の日浦氏は、まるで推理小説を読んでいるかのような展開で、蝶の生態を紐解いています。

たとえばウラナミシジミというシジミチョウ科の蝶は、冬を越す越冬態という生活史を持たず、冬に死に絶えた後、翌年の夏にはまた忽然と姿をみせる蝶です。蝶は一体どこからやってくるのか。日本中の蝶愛好家からの目撃記録を集め、食草となるマメ科の各地の生長記録とマメ類栽培地の情報をもとに、ウラナミシジミが世代を重ねながら数 100km の旅をしていることをつきとめた一人の研究者を紹介し、この蝶の行動の「歴史的変遷」は、気候条件だけでなく、人間が栽培するマメの農耕の歴史とも深くかかわるものとして、より広範な考察へと展開しています。身近な生きものの中に、私たちの想像を越えたダイナミックな生き様があることに興味はつきません。

※このコーナーでは、生物多様性センターに最近入荷した図書からご案内します。貸し出しはできませんが、ぜひセンターへ立ち寄って手にとってみてください。



人の動き 2004年1月～4月

<転出>

情報システム科長	大塚 孝泰	(国土交通省国土地理院へ)	【4月1日付け】
調査科主査	並木 光行	(環境省自然環境局国立公園課へ)	【4月1日付け】
調査科係員	七目木 修一	(環境省地球環境局研究調査室へ)	【4月1日付け】

<転入>

情報システム科長	水田 良幸	(国土交通省国土地理院から)	【4月1日付け】
管理科主査	宮嶋 幸司	(環境省大臣官房会計課から)	【4月1日付け】
調査科主査	鎌田 由美子	(近畿地区自然保護事務所から)	【4月1日付け】
調査科係員	長山 聡枝子	(環境省自然環境局総務課から)	【4月1日付け】
調査科係員	澤栗 浩明	(新規採用)	【4月1日付け】
調査科係員	櫻又 涼子	(新規採用)	【4月1日付け】

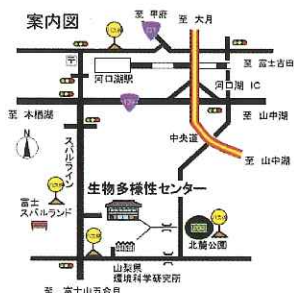
センターの動き 2004年1月～4月

1/28 都道府県担当者会議	3/8 イエローストーンNP Chief Ranger 視察
2/13 JICA 集団研修 (ボスニアヘルツェゴビア)	3/17 基礎調査検討会
2/17 第2回植生分科会	3/18 JICA ブラジル CP 研修
2/20 中華人民共和国 東北村営大学視察	4/16 財務省 主計官視察

土・日 開館のお知らせ

5月より10月までの間、生物多様性センターの展示室を土・日曜日も公開いたします。今シーズンから図書資料閲覧室に配架されている蔵書の検索用パソコンを展示室入口に設置いたしましたので、ご利用ください。開館時間は下記の時間になりますので、お近くへお越しの際にはどうぞお立ち寄りください。

- 展示室 開館時間：9:00～17:00 休館日：5～10月 祝日 (土・日と重なる場合は開館)
- 図書資料閲覧室 開館時間：9:00～17:00 休館日：土・日・祝日、12/28～1/4



発行：環境省自然環境局生物多様性センター
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
電話：0555-72-6031 FAX：0555-72-6032

URL：<http://www.biodic.go.jp/> e-mail：newsman@biodic.go.jp

※ニューズレターは下記 URL からご覧頂けます。

URL：<http://www.biodic.go.jp/center/news/>